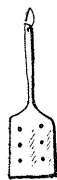


保育の体験と思索

——子どもの世界の探究——（十）



津 守 真

流れゆく暗い奥をのぞく

六月二日

Tは活発で積極的な、明朗に見える子どもである。この日、久しぶりにTは私の手をひいて水道の流しにきたので、私もゆつくりとつき合うことができた。Tは知恵遅れがあるが、最近はいっきりとした口調でおとなと話す。

Tはプラスチックの桶に水道の水をいれ、ポスターカラーをいれる。水があふれそうになり、泡がたち、きれいな色水になると、水道をとめ、水をいちどきにざっと流す。その流しのわきに、雑

巾流しがついており、床面まで深くなっている。Tはその中に首をいれて、水の捌け口の渦巻状の金具をとって、奥の方をのぞきこみ、耳をそこにつける。こういうことを何回もくりかえすので、私もTと同じように、深い流しに首をつつこんで、耳をつけてみた。奥の方で音がきこえる。

よく注意して見ていると、桶の中の水が青色に染まり、あるいは赤色に染まり、水圧で湧き立って泡が出るのはとても美しい。Tは、ホワイト、レッドなど、英語で色の名をいう。私がわきで見ているよりも、本人にとっては、もっと美しい色の水なのではないかと思う。その水をざっと流すと、流しの捌け口の金具は、少し浮き上がり、水は渦を巻いて下の方に流れてゆく。それは四十分くらいつづいた。私はTのこの作業につきあっているうち

に、これはTにとってまじめな作業であると思うようになった。

単純な手順ではあるが、自分で作った美しいものを、自分の手でひっきりかえして流し去り、渦を巻いて捌け口から下の方に流れてゆくのを見、さらに、その音が消えてゆくのを耳をつけて聞く。その流しの捌け口の金具をはずして、目をつけて奥の方を見るとき、その下の方が黒く暗くつづいていることに、私ははじめて気がついた。私はTとつきあいながら、この二年あまりの間に、私がTとふれたいくつかの印象がさっと心をよぎり、暗く口を開けた彼方の世界を見とどけ、克服しようとするかのようなこの子どもの遊びを、私自身も似たような課題を負っているように思えて、一緒にゆくりとつき合うことができて満足であった。

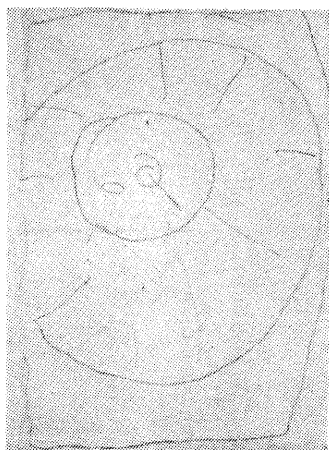
Tは、ずっと以前から、外に出ると、マンホールや止水栓に興味を持ち、母親を困らせていた。丁度、一年半前に、たまたま私がTを公園に連れていったとき、Tは止水栓を開けたりしめたり、マンホールのところにしゃがみこんで、中をのぞいたりしていた。そのときも、私は一緒にマンホールをのぞきこみ、その下の水が流れているのを実感した。それまで母親から話にだけきいていたマンホールと止水栓を実際に経験してみると、土の下の底の方に流れる水であることが、一種、無気味さをもって感じられたことが、その時の記録として残っている感想である。また、止水栓の

真中に、指一本の穴があいていて、そこに指をいれてあげようとしてもあかないで、足でふむとガタガタと音がすると、耳をあてて聞く。この後も、同様のことを何度か経験した。母親は、外出を好む、こうしなければ気のすまない子どもを連れて、途方にくれたり、情なく思ったりしている様子であった。その親子の歩いてゆく後姿に、肩を落とした寂しげな表情を見た。Tは活動的であり、母親は大きな声で多弁に話すのだけれども、寂しげな暗い印象は、接するおとなたちに、かなり共通のものであった。その後、いろいろのことがあったが、最近一年くらいは、Tも母親も落着き、明るくなって、以前の暗い印象はなくなって、調子のよい上向きの生活をしている。

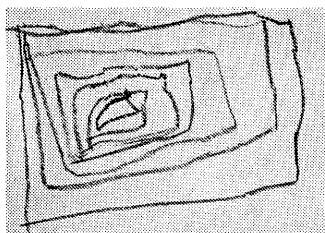
いま、私は、Tのこの日のことを語るのに、このような過去のことを記す必要はなかったのだと思う。けれども、たまたま同じ子どもと、二年間にわたってつき合ってきたので、一貫して見ると、この子どもの内面に、同じモチーフが継続しているのを知ると、もちろん、今回の水の流しのできごとの方が、美しい色水を自分で流してその成行きを見るのであるから、より明るく、輪郭も明瞭である。しかし、この子どもの生活の中に、黒く深い闇が横たわっているように思われる。Tは、元気のよい同年の子どもたちが遊んでいるところを避けて歩く。来年は学齢であるけれども、

普通学級にゆくことはいまのところ考えられない。親も子も、社会的な目で見るならば、未来は光り輝いたものではないであろう。T自身、こうした自分の周囲や未来について、明瞭な自覚はないであろう。が、自分の前に横たわる暗く深い闇を、自らの内面世界の中に見ているのであらうことを、Tとふれ合ったこのような体験から、私は考えるのである。

内的世界における闇の淵のイメージは、かならずしもTに限ったことではない。Tの色水を流す遊びのことをとり出したとき、直ちに私に思い浮かんだ事例がいくつかある。そのひとつは、自



▲写真1



▲写真2

閉的といわれたKがおとなに要求して描かせた大きな渦巻と、それに相次いで自分で描いたうずまきの描画である。(写真1) Kは、流しに水を流して捌け口から水が渦を巻いて流れてゆくのを熱心に見ていることがしばしばあった。この渦巻は、明らかに水が渦を巻いて流れる捌け口である。捌け口の渦巻型金具と、そこで渦を巻く水は、流しの表面の水と、暗い下方に流れ去る水との境にある。渦巻の動きの中心は、下方に伸びて下にさがってゆく。渦巻はその境にあって、下方へひきこむ力を表わしている。

もうひとつの例は、Bの描いた角型の渦巻きである。(写真2) Bは、言語もなく、おとなとの通じ合いも少なく、高い戸棚の上などに上がることが多く、どこから手をつけてよいかわかり難い

子どもであった。その子どもがある日突然、この四角の渦巻きを描いたのを見せてもらったとき、私は何かこの子どもの内的世界を垣間見たように思った。幾重にも内に向かう同心円の中心は、下方の深淵へと吸いこまれるような動きを感じさせる。

外から見ると、知恵がおくれ、発達がおくれているように見えるこの幼児たちは、むしろ純粋に内的イメージに生きる人であるように思われる。彼らは、その遊びの中に、あるいは描画の中に、際立った形でその内的世界を表わしてくれる。しかし、それは、この子どもたちだけの特殊な世界ではない。むしろ、人間がだれでも、その心の奥にもっている世界を、余計なものを取り去って、なまのままでの形で示しているものではないであろうか。老人が、再び起き上ることはできないであろう床の上で、夜中に騒いで周囲の人をねかさず、朝日がさして、家の中の人々が起きはじめると安心して眠りはじめることをしばしばきく。人がだれでも迎える老年の最後の時期でありながら、元気なときにはその心境をはかり知ることとはむづかしいことであるが、自らの中に横たわる暗い深淵のようなものを見ているのではなからうかと思う。それは人が、究極的には乗り越えることはできないものであろう。けれ

ども、同時に、楽しむことを自らの中に見出しつつ人は生きていくのだと思う。その光の側を強調するあまり、暗い深淵に目をふさぐと、精神分析が教えるように、暗さはますます拡大して、抗し難い恐怖にまで至るのであろう。

いま、Tは自らの中にある暗さを、いわば、確かめ、克服しようとしている。傍にいろおとなは、その心境に共感し、自らの中にそれを深めようとするとき、子どもはその行為自体に、安らぎと楽しさをも見出すであろう。そして、この子どもの場合のように、そこに見出すものが暗さにつながるものであるほど、その子どもの生活の中に、楽しさを加え、明るさを増したいと思うのである。

流しに水を流して遊ぶTの傍にいて、水の捌け口の奥の暗闇をのぞきこみ、水が流れ去る音を聞いて、私が感じとったことを、後になって考え直して記す以上のようなことである。三十分も四十分も、水を流して遊ぶとき、ただ遊んでいるというのには、子どもはあまりにも、自らの内に何かを追求し、見きわめようとしているように思える。とするならば、私共も、これを外面的にとらえるのではなく、内面で受けとめ、自らの内に深めてゆくことを努めたいと思う。そうするとき、子どもの内的世界にふれることが可能になる。この面から保育を定義するならば、保育の場

において、子どものすることに意味を見出して、自分の内的世界の中でそれを探究することであると言ってもよいと思う。そのときに、子どもは、自分の理解者を見出し、自分の道を歩むことができるようになるであろう。

保育研究の方法について

科学的な研究法というときには、証拠を集めて、一般的結論を導き出す方法論がまず考えられる。こういう方法論で追求できる分野があると思うし、それ自体、意義のあるものである。しかし、具体的な保育の場合は、保育者にとって一回ごとに新たな場であるので、一般的結論を応用してすむことではない。それでは具体的な保育の実践は、実践的直観と常識あるいは経験によって行なわれるものであるかという、そんなに簡単なものではない。一回ごとに新たな実践の場における研究と、そのための修練があるのだと思う。その核になるものは、子どもとのふれ合いにおいて、体で感じとられるものである。すなわち、子どもの内的世界は、動きや表情などに微妙に表現されるものであって、おとなはその傍におり、共に動くことによって、体験することのできるものがある。それがとらえられないと、保育の実践も研究も出発しない。

それが体験として蓄積され、自分のものとして深められて、次の保育に環元されるならば、それは保育の実践である。その過程を言語化し、自分自身に納得のゆくものになるならば、それは研究となる。その言語化には、いくつもの段階があるのであって、私共は、そのことの言語表現の修練をもつまなければならぬのであると思う。それがすなわち研究ともいえる。このような研究は、前に述べた、いわゆる科学的研究による一般的結論を得るような研究の概念とは異なるのであるが、保育研究における一つのジャンルである。このような研究において目指されるものは、事実相互の間にある一般化ではなくて、体でとらえられたものの実体になんとも近づくことであると思う。

今月は、四歳児の保育にはいる前に、保育研究の方法についてあらためて考えてみた。

(つづく)

